ちょっと変な艦娘が着任したようですよ！

夜桜の猫の方

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

転生物は古い？知った事か!!ならばやり直し系も含めればいいじゃない。見切り発車で駆け抜けます！

「ところで、どうして僕なんだい？」

「そりゃ一番ストーリーが立てやすいからだよ時雨君」

あ、タグが勝手に増えていくけど気にしないでね。

目　次

〇話　前略　艦娘になりました ―― 1
温泉談義　ｉｎ長月 ―― 10
特典ですか？いいえ、初期装備です ―― 15

○話　前略　艦娘になりました

「どうやら、おまえさんは死んでしまったようじゃ」
「そうですか。では艦これの世界へ「まてまえまてーーい!!」
「なんですか?」
「君死んだんだよ!ゲームオーバーだよ!?もうちょっとこう……ね?」
「無理です。」
　ｏｈｕ…と頭を抱えている白髪のお爺さんはたぶん神様かな?ここまでリアクションが無いのは僕のせいだから仕方ないとしても
「まったく、これだから最近のニートは……」前言撤回一発殴って良いかな?
　ええい!ニートで何が悪い!確かに社会的には最低地位だが自宅警備員としての仕事があるんだぞ!家事スキルが母親より高いとご近所さんには好評だったんだからな!一部では独身の専業主夫と
　なんだろう。悲しくなってきた
「ぶつぶつ……で、お前さんは艦隊これくしょんの世界に行きたいと?」
「でって。まあ、はい。僕が最後に遊べたゲームがそれだったので……」
「む?最後に?ちとまっておれ。今お主の履歴書を取って来るからの。」
　そう言って目の前から消えてしまった。と言うか履歴書って。面接みたいだな。
　ちなみに、今いる所は畳6畳半の和室かな?家具は何もない。しいて言うなら、僕が座っている座布団くらい?
「それにしても、艦これの世界か……どんな世界だったかな」
　最後に遊んだのは何時だっけ。深海棲艦だったかな。異形の怪物に軍艦の力を持つ少女が立ち向かう。プレイヤーはそんな少女達を指揮する提督として共に戦う。で、合ってるはず
「ああ、思い出した。3ヶ月前かな?それでも覚えているってどれだ

け思い出深いゲームだ、いや、世界か。まったく、自分の事ながら辟易するよ！」
僕の生きていた世界で3ヵ月も覚えていたなんて。と呆れていたら神様がいつの間にか戻っていた。
　片手にノートパソコンを持って。
「待たせたな！君を送り出す手続きが完了したゾイ！」
「そうですか。ありがとうございます神様」
「ちょっとくらい突っ込んでくれてもいいジャマイカ」
　ぶーと口を尖らせながらもカタカタとパソコンを操作していくと、不意に僕の体が光に包まれる。転生ってこんなサクサク行くものかと目を瞑った時
「あ」
　……何だろう。凄く不吉な予感がする
「あの、神様？」
「ごめん。指が滑っちゃった☆「えええええ!?」
「だだだ大丈夫だ問題ない。ただ提督から艦娘になっただけ……あ〝」
「待ってください、今度はなんの「あ」ですか！まさか艦娘は艦娘だけど深海棲艦側として生まれるとかじゃないですよね!?」
　僕が光から抜け出そうと必死にもがくが抵抗空しく意識が遠のいていく。
　戦艦タ級とかヲ級なら良いけど駆逐級はいや――――!!
　あ、でもわるづきは大歓迎
　ちなみに、神様はとてもいい笑顔で
「まあ、良いんじゃないかな。楽しく生きれば何とかなると思うよ
　姫級とかには転生できないけど。ガンバ！」
　そんな殺生なーーーーー!!!!!
「――――の目の前がまっくらになった……」
「ポケ〇ンかな」神様五月蠅いです。

―
…暗い。それに少し冷たい。体も一切の力が入らず指先すら動かせない。でも、不思議と恐怖は無かった。ただ体を優しく包まれる感触に身を委ねていたいと思っていた。目を開く事は出来ない。開けたいとも思わない。これは、夢？それとも、僕が死んだのは嘘だったのだろうか。

　なら、ずっと寝ていても良いだろう？

『君は誰？』

　不意に頭に響くように聞こえる『よく知っている少女の声』。それと同時に脳内に浮かび上がるノイズの混じった映像。色も白黒で見えにくい事この上ないけど、これは何かの船に乗っている？あそこに見えるのは砲身？再び目を海に戻せば視界いっぱいに広がる巨大な船。僕が乗っている船の何倍だろう？その向こう側にはこちらと同じような大きさの船――と言うより軍艦かな――が見えた。

　そ こ か ら 場 面 は 転 々 と 切 り 替 わ る。 こ れ は ……駆逐艦・時雨の記憶（君の物語）？

「僕かい？僕は――君は？」

　あれは戦艦かな？それも二隻。と戦艦よりちょっと小さいけど僕の船よりは大きい『ミガモ』？って横に書かれている。その他には同じような大きさの船が４隻その四隻にも同じ様に名前がカタカナで書かれている。その名前を見て古い記憶が開いたのが感じ取れた。たぶん、今僕が乗っている船って

『僕の名前は――

　視界が白一色に塗り潰される直前、彼女の姿を幻視した

――――――――――――――――

―

「………ですか？」

　誰かに呼ばれている？でも体が激しく揺らされていて酷く気分が悪い。先ほどの沈んでいるような温もりが一切なく瞼を閉じていて

も痛いくらいに光が突き刺さっている。
ん？光？
「なあ、ソイツは何時まで眠っているんだ？」
「わからないのです。でも、このまま放置する事は出来ないのです。」
「私も手伝おう。流石に一人では支え難いだろう。」
「ありがとうなのです。長月ちゃん」
どうやら僕は運ばれているらしい。誰かはすぐに分かった。いや、余りにも特徴的な話をする子だったのと
最初の、秘書官だったから
「いな……ずま……？」
「はわ！お、起きたのですか！具合はどうですか。何処か悪かったり」
「落ち着かないか。彼女も捲し立てられたら困るだろう。」
「そ、そうでしたね。御免なさいなのです。」
そんな事ないよと口を開くが掠れた声しか出ない。おまけに凄まじい倦怠感に意識が落ちそうになる。
何とか踏ん張って視界を上げると、少し先にチラチラと様子を見る――木曾かな？マントをしてないから軽巡だと思う。少し離れた所には、北上？が欠伸をしている。制服がへそ出ししていない暗めの色だから多分軽巡。
「あ、起きたんだ。おは～」
「姉さん、鎮守府に近いからって油断しないでくれ」
「だってつまんないんだも～～ん」
木曾は苦労人だなぁと再確認していると顔のすぐ近くからジッと視線を向けて来る電が。反対側には緑色の腰まで伸びるストレートヘヤーに黒一色の制服――長月が同じ様に見つめていた。と、この体は回復が早いのか倦怠感が薄れてきたぞ
「ありがとう。もう大丈夫だから」
御礼を言って立とうとすると慌てて二人に抑えられた。え？何かマズかった？
「待って下さい！貴方はまだ海の上に浮く事が出来ないのです！」
「うむ。艦娘としての力が振るえない以上、今は私達に身を委ねてく

れ。」
　あー。確かに浮く方法が解らない。もっと言えば艤装の一つもないじゃないか。危うく出オチになる所だった。
　海の妖精（笑）になるのはまだ早い
「じゃあ、お言葉に甘えようかな。でも、重くないかい？」
「大丈夫です！艤装を付けているので鉄骨でも楽勝なのです」
　電ちゃん鉄骨と比べないでください。地味に、いや結構傷つきます。ほら、隣の長月もジト目を向けているし。あ、自分の発言に気付いたようで「はわわわ」と慌てている
　うん。かわいい。
　暫く可愛い生物を眺めていると前方の木曾さんが声を掛けて来る
「おーい！もう直ぐ泊地に着くから少し静かにしてくれ」
「は、はいなのです！」
　電ちゃんが返事すると木曾は艤装からヘッドホン？みたいなのを取り出して頭に着けた。同じように北上もヘッドホンを着けている。彼女達は何をしているのだろうか
「お二人には水中ソナーで潜水艦がいないか索敵して貰っているのです」
「潜水艦？」
「はい。私達がいる鎮守府――――いえ、泊地は開港したばかりで深海棲艦が多くて、特に潜水艦系が多いのです。」
「おまけに司令官もまだ着任していないと来た。おかげで、私達は本来の力の微々たる量しか発揮できない。現状、ああして周囲の警戒しか出来ないのさ。」
「へー。え？提督の不在って言った？」
「はい……」
　それは、中々のハードモードだな。どの世界でも艦娘は提督となる人間との信頼あってこそ本来の――もしくはそれ以上の――力を発揮できる。提督がいないとなれば『レベル1状態かつ改や改二が実質不可能』って事か。やれなくはないけど木曾や北上が改や改二にならないのは辛い。特に北上さんはゲームでもお世話になった重雷装巡

洋艦になるからね。早めに改造したい、したくない？
「あの、貴方の名前を教えて貰ってもいいですか？」
「ああ。僕の名前は……」
マズイ。ヒジョーにマズイ。
「？あの「名前だよね！えっとね。その、ね？」
「ね？と言われましても」
今、僕は誰の容姿を借りているんだ？艦娘なのは間違いない。助けてくれたし。（電ちゃんの性格からして深海棲艦でも助けそうな気がする）今は無視！今一番の有力候補はさっきの夢？で見た『白露型駆逐艦2番艦・時雨』だが、これはあくまで憶測にすぎない。幸い、周囲を見渡した時に原油工場らしきものが見えたからここを『1―3海域』だと仮定する。かつそこでドロップする艦娘および視線の高さから駆逐までは予想できた。と言うか、軽巡に黒い制服を着た人はいなかった、はず。
てことは自分は『睦月型の数人』か『白露型』まで絞れる。
なにか、何かあと一つヒントがあれば！
「もしかして記憶を失った艦娘ですか？」
「う!?うん。ゴメン。」
電ちゃんって速いのね。もう確信突いちゃったよ。
「だ、大丈夫です！生まれたばかりの艦娘が記憶をなくしているのはよくある事なのです！」
「そうなの？」
「ああ。最近になって急激に増えたんだ。軍艦としての記憶のない艦娘がドロップ、いやすまない。自然発生するようになったのは」
「自然発生って。僕は野菜か何かかな」
苦笑いをしながら視線を下げる。
しかし。今気づいたが
「どうして僕は服がボロボロなんだろう？」
「電たちが来た時には艤装も身に着けて無く海に漂流していたのです。」
「さすがの私でも見ていられなかったぞ。」

あの、神様？誕生早々中破（しかも艤装なし）で放り込むのはハードモード過ぎませんかね？主砲も魚雷もないんだよ！

黒一色の制服はボロボロで赤い布が首に巻き付いているけど今にも千切れそうだ。スカートも殆ど破れているし、中々に羞恥心を煽ってきますねクォレハ。

その時、コツと左目の横当たりに布みたいなのが当たる感触が。長月に理を入れてソレを取る。今気づいたけど指ぬきグローブをしていた。グローブを着けていて初期にドロップする艦娘？お、思い出せない。

ああ、取ったのはどうやら髪飾りみたいで煤に汚れているけど、紅真珠？のような数珠に羽のような形の布で同じ色の一回り小さな数珠に繋げられている。

これってさ、扶桑と山城の髪飾りじゃ。でも、僕は駆逐艦のはず。まさか、幼い扶桑、山城の可能性が微レ存!?

まあ、冗談はさて置き

これで確定した。僕は『時雨』だ。

しかも『改二状態』。転生特典って事なのかな？でも、性能はあっても僕の練度はそこらのイ級と同レベルなのですがその。

「もう、自分が何だか分からなくなったよパトラッシュ」

「ぱと、パトら？」

「ああうん！何でもない。名前は後で思い出してからでも良いかな？僕も凄く混乱してるからさ」

「勿論なのです！あ、見えてきました！あれが『柱島泊地』なのです！」

「おー、お？……あの、あれ？」

「皆まで言うな、なのです。」

「言いたいことは分かるぞ。私も初めに来たときは驚いたものだ。」

「驚くっていうかさ、あれ、魚市場？「鎮守府なのです!!!」

ゴメン向こうの世界に有った魚市場にしか見えない。波止場も相まって鎮守府と言うより魚介組合の船着き場にしか見えない。あのマンションぽい所が寝泊まりする所かな？

で、工廠はどこ？入居施設は？

脳内を盛大な疑問符で埋め尽くしていると木曾が波止場に近づいて
「よっと」
ちょっとー！あの人艤装着けたまま陸地に上がったんですけど!?
ちょっと高い段差上がるみたいに上ったんですけど!?
「木曾、パス。」
「おっと。姉さん艤装を投げないでくれ。危ないから」
「あーごめんごめん。よっ」
え？艤装って投げれるの？投げていいの？あ、妖精さんが回収していった。妖精さんはいるんだ。
「貴方はあんな事しないでくださいね。」
電ちゃんから釘を刺されてしまった。べ、別にしたかったとかじゃないし！ソオイ！とかやりたくはないんだからね！
「うん出来ないよ。艤装ないしポッタイシ」
「？兎に角、入渠場に案内してするから私について来てくれ。」
「うん。アリガトウゴザイマス。あ、そう言えばここは普通の人はいないの？」
「島の反対側には結構いるのです。たまに買い物に行くときもあるのです」
「あ、ちゃんといるんだ」
「人が入って来たのは最近だな。だから島の人は殆どが軍の関係者だったりするな。あとは、大工や漁師だったりか？」
深海棲艦から領域を取り戻したばかりだから、か。それって結構危険な海域では？はぐれで戦艦とか来たら沈没待ったなしなんですが、その危険性はかなり低いらしい。噂によれば本州の提督たちが徹底的に近海の深海棲艦を駆逐したかららしい。あれか、ドロップ艦の沼に嵌った提督だろうな。
ドロップ……イベント限定……海外艦…う、頭が！
「ほら捕まりな」
「あ、ありがとう木曾さん」
「ん？まあいいか。電、俺と姉さんは工廠の方に行くから艤装を渡せ。

長月は、風呂か？」
「ああ。コイツを連れて行かないとな。ついでに服も直してもらうとするさ。」
「電は報告に言ってくるのです。その後、一五〇〇にここ集合で解散なのです！」
　電ちゃんが小走りでマンションっぽい場所へ。木曾は艤装を抱えて（全部!?）魚市もとい工廠の方へ。
「で、入渠するお風呂？は何処にあるの？」
「ああこっちだ。一応重要区画だから工廠の裏手側に有るんだ。付いて来てくれ。」
　長月に付いて行くけど、本当に誰もいない。鎮守府って騒がしいイメージがあるけど、人も艦娘もほとんどいないし工廠から音も聞こえない。恐らくお昼に近い時間なのにただ波の音と僕達が歩く音だけが泊地に木霊している。何時しか僕は止まって誰もいない鎮守府を眺めていた。長月は何か言おうとしたけど黙って待っていてくれた。
「本当に、静かだね。」
「なに、これから騒がしくなって来る。静かなのは今の内だけだぞ。」
　えらく確信に満ちた声と表情で言う物だから思わずどうしてと聞き返したけどが
　彼女は笑みを深めて本当に楽しそうで
「なにせ、この泊地（物語）はまだ始まったばかりなんだからさ。」
　楽しみだ。そう彼女は笑った。
　たぶん、僕も――――

温泉談義　ｉｎ長月

さて、僕は今大変な危機に陥っております母さん。
長月に連れられて入渠施設に来たんですね
そこまではいい。
だが
「どうした?服を脱がないと風呂には入れないぞ。」
そうです裸にならなきゃね。問題、ないですか?
問題しかないです!長月もすでに脱いでます。真っ裸ですよ真っ裸!誰か助けて電えもーん!
「な、長月は先に行っててくれないか」
「構わないが、その格好でいると風邪引くからな」
「う、うん」
いたいけな少女が向こうに行ってから大きな溜め息が零れた。いや、うん
長月、綺麗だったな
「違うそっちじゃない。」
淋しい一人突っ込みも時雨がやっていると思えば・・・淋しいな。
あ、予想道理で僕は時雨だったようです。神様グッチョブ
しかし、なぜ中破状態で漂流していたのだろうか?
実は転生じゃなくて憑依だったとか?
とりあえず、目を瞑ったまま服を脱ごう。流石にいきなりはアカン。
ほとんど破れていた上着を脱げばブラウスが覗くはずが焼け焦げて殆んどない布切れになっている。あ、今の衝撃で完全に切れた。ブチって音したし。纏めて洗濯篭に入れて男では恥ずかしいと思っていたスカートを下ろすが、目を瞑ったままだからか脱いだスカートが掴めない。仕方なく目を開いて体から目を逸らしつつ視界の端にあったので拾い篭にいれたが、それがいけなかった。
はい。鏡がありました
「あ・・・・・・・」

視界の先の鏡に映るのはほぼ半裸の少女であり呆けた表情を浮かべている。肌は穢れを知らないかのように白く手足はスラリと伸びている。肉付きはどちらかと言うと細身で腰は折れそうな程に細い。胸部は主張こそ激しくないが男性の掌に収まるような揉むには丁度いい大きさだった。

だが所々に戦いの傷なのか打撲後や血の滲んでいる部分があり自虐心をそそられる。あら～うふふ

そして、下着はスカートを脱いだ時にずれたのかぎりぎり見えないところまでずれていてそこは黒色など一切見えなくて『アカーン！』

「はわ、わ、わわわ!?」

そこまでして漸く目を逸らして素早く脱いでタオルを体に巻く。その行為事態も眼福なのだが、脳内から速くタオルを巻いて！と羞恥に染まった声が聞こえた気がしたので行動に移したわけだ。

それに

『オーイ！まだ入らないのかー』

長月も呼んでいるしね。勿論、お風呂に入ると言うことは長月の一糸纏わぬ姿を見ることになる。

駄菓子菓子！

恐れるに足らず！大天使時雨を越える物など有りはしない！断じてロリコンではない僕には駆逐艦の裸など恐れるに値しないのを証明して見せようぞ！

さあ、開けゴマ！

「ああやっと来た・・・・・おい。なぜ目を逸らす。」

温泉で濡れた体で四つん這いになり、長い緑色の髪を所々体に張り付かせて秘部を絶妙に隠す。

体温が高いのか頬や肌が蒸気して朱に染まり、少し微笑みを浮かべながら上目遣いのお出迎えは

ちょっと、いや結構ズルいと思います。

「は～癒される～」

「だろう。泊地の温泉とは言えバカには出来ないさ。」

「ちょっと狭いのが難点だけどね。」
「そこは、勘弁してくれ」
　あのあと何とか長月には慣れて（言い方）普通に話せるようにはなったけど多分一番の要因は今の状態だと思う。
　お風呂場は何と一つしか空いていないのだ。ゲームだとすれば最初は二つ解放されていたのにここは1つ。何でも資材が足りないらしい。なので長月と肩を寄せ会わせて一緒にお風呂に入っているので嫌でも慣れてしまう。
　あと、長月って柔らかいのね。
「そう言えば、名前は思い出したか？」
「うん。僕は白露型2番艦の時雨。これからよろしくね」
「時雨だな。改めて、睦月型8番艦の長月だ。旧型の睦月型だが侮らないでくれ。こちらこそよろしく頼む。」
　握手をビシッと交わす。いいねぇこう言うの。嫌いじゃない。と、何故か脱衣場の方から声が聞こえるような
「それは妖精達が私達の服を直してくれているのだろう。」
「なるほ『糸の塊となって、沈みなさい！』ほえ？」
『お前は最後に縫うと言ったな』
『そ、そうだ監督、待ってくれ！』
『あれは嘘だウワアアアアアア』『ヴェアアアアア！ニクラジイヨー！』
『バガヤロオオオ！何処を縫ってやがる！フザケルナアアアアアアアア！』『裁縫か。ならば同行しよう。』『アカイシイン！』
「あの、大丈夫？」
「直ぐに慣れるさ。（いや、なれちゃダメでしょ！」
　所で、時雨は艦娘の力をどれくらい扱えるんだ？」
「あーどうだろう？多分全く扱えないと思う。」
　異世界転生者が魔法を使えないように僕だって元は普通の一般人だ。何処かの名も無き時空最強の庶民的とは違う。なので艦娘の力が使えないのではなく使い方が分からない。その旨を長月に伝えると

「では今の内に水に浮く位は練習しておくか。と言っても凄く簡単に出来るから安心してくれ。」
「良いのかい！ありがとう。お願いいたします長月先生！」
「ふふん、任せたまえ！まずは説明するからよーく聞いててくれ」
そう言って立ち上がりこちらに振り向く。
ふむ。僕、今日からロリコンになります！速くブッパナシテエナ―
「そうだな。自分の内側から力を引っ張り出す感じか。目を閉じて心臓に手を当てると分かりやすいかもな。」
おっと授業は始まっていたか。えっと、目を閉じて心臓に手を・・・胸の柔らかみを直に感じちゃう！
じゃなくて！力を内側から？
「先生！ヒント下さい！」
「う～ん、私も感覚でやっているからな。そうだ！私の手を取ってくれ。」
「ん、了解」
差し出された手をとる。思ったより柔らかくて小さくて、戦い何て知らない少女みたいな手を握っていると眼を瞑ってと言われ慌てて瞑むる。
何を？と思った瞬間、長月から何かが流れ混んでくる感覚と共に、広大な海洋に浮かぶ軍艦が脳裏を過る。
頭に靄がかかった用に思考が鈍くなるが、その艦が誰かは解る。長月じゃない。それは僕であって僕じゃない。彼女の艦だ。
それに近づきたくて鉛みたいに重い体を動かす。でも全然動かない！僕が悪戦苦闘していると後ろから声を掛けられる。
『体だけで動いちゃダメだ。心で動かさないと。』
その言葉はストンと心に響くようで不意に頭が鮮明になる。
『君の世界で言うフルダイブ型のＶＲの様に体を動かすんだ。ゲームに没頭すると脳内で先に動きをトレースするだろう？それと同じさ。大丈夫、君なら出来るよ』
フルダイブはまだ開発されてないんだけどね。でも伝わったよ。まず脳内、いや、僕の場合心で考えよう。心臓の中心部辺りで時雨が

歩く姿を思い浮かべる。足で動くんじゃない。心の思うまま一歩を踏み出す。
「うん、もう重くない。ありがとう、時雨」
『どういたしまして。提督』

「お、浮けたじゃないか！」
「ん・・・・・浮いてる。」
水面に全裸で浮く少女が二人。う～ん、事案が起こりそう。
そんな思考は隅に置いて、体に何かが薄く纏っている？これが噂の艦娘パワーと言うやつか！
なんか案外上手く行って余りの拍子抜けさに全身が脱力した瞬間
全身が浮遊感に包まれる・・・え？
「ノボオオオ!?」
「うわっっ！追々力を抜いたら沈没するに決まっているだろう。力の抜きすぎだな。」
思わず長月に抱き着いたが膝したまで浸水してしまった。
今に思うが、浸水して沈むのが急に怖くなった。前までは大丈夫だったのに。これが艦娘が無意識に抱く沈没の恐怖か。べ、別に怖くなんかないんだから！
「とりあえずそこら辺の力の抜き具合を特訓だな。」
「はい・・・・お願いいたします長月先生ぇ・・・・」
「ん!!」
まずは、浮く練習だ！

妖精1「あいつら、何で裸で抱き合ってるのじゃ？」
妖精2「知らないのか？あれが百合と言うやつだ。百合が集まるとどうなるか解るか？」『分かりません!!!』
「百合が集まると、世界の真理が開くのさ」フッ
「ふーん。あほくさ「ふぁ!?（。ロ。；」

特典ですか？いいえ、初期装備です

「は!?長い夢から覚めた気がする。」
「お前は何を言っているんだ？」
「いや、別に・・・」
何故だろう。凄く長い間眠っていた気がする。
え～と、長月と入渠施設で損傷を直しつつ、艦娘としての力を引き出す特訓をしていたはず。
あ！思い出した。
「入渠場で小破したからかな？」
「本当に申し訳ない←。私も熱くなっていたようだ。」

ーーー回想
『もっとだ！もっと力を込めろ！』
『こ、こうですか！』
『もゥとだって言っているんだＹＯ！』ドンッ！
『あ”そんな急に押したらバランス～～～!?がはッ！』←ユカに直撃
『あ・・・・・し、時雨？頭から逝ったけど大丈夫、か？』
『ありゃ～血が出てますね。』『オイオイオイ。あいつ死んだわ。』

『この僕をここまで追い詰めるなんて、ガク『駆逐艦大破ー!!!衛生兵！エイセイヘーー！』
『待たせたな！』←イケボな迷彩服着た応急女神
「この不始末は必ず返す！本当にすまなかった！」
「気にしないで良いのに。じゃあ、後で甘味でも奢って下さいね長月先生。約束ですよ。」
「ああ。約束する！」
やっと長月が笑顔を浮かべてくれたところで現状報告と行きますか。
まず、僕達は工廠に向かっている途中だ。お風呂上がりに電ーーー今は提督代理らしいーーーに僕の装備が復元できたらしいから受け

取りに行ってくれと伝えられたからだ。
　最初はこの体の本来の持ち主、つまり時雨の装備を未熟な僕なんかが扱って良いものかと怪訝な顔をしてしまったけど
『例えそれが自分の装備でなくとも、使えるものは何でも使え。もう、そんな段階なんだ』
　長月の言葉に決心を固めた。どうやら思った以上に敵の進行は苛烈らしい。だから、僕は彼女の装備を受け取ろうと決心した。
　それにしても、転生者達は何しているんだ？折角のメタ知識を無駄に・・・・ああ、そうだった。思い出した。
　ーーーーこの世界は現実だった。
　システムによって決められたゲームじゃない。
　例え無傷で戦闘に入っても、死ぬときは轟沈する
（・・・・・死ぬのは、死んでも僕を許さない）
彼女（時雨）の体を借りている以上、時雨に泥を塗ることは許さない。醜態を晒すままの垂れ死ぬのは僕が僕を許さない。
　――彼女に、時雨に相応しい強さを持たなければ行けない。
　そう心に結論を出した瞬間、誰かに背中を引っ張られる。振り替えるがそこには誰もいなくって、ただ
『・・・・・・・ごめん』
　そう聞こえた気がした
「時雨？どうかしたか？」
「・・・・うんん。何でも。それより、工廠って？」
「ああ。ここだ」
「え!?う～ん。何て言うか、凄く、列車です。」
「そうなのか？これが本土にあるレッシャ？と言うやつなのか」
　と言うか、仮面ライダーで見たことあるんですけど!?何だっけ、あの時間を越える列車の名前！てか、見た目一緒やんけ。え、もしかして未来編とか始まっちゃいます？特定のフラグを立てると工廠が実は本物の列車とか
　鬼退治ならぬ深海退治するとか？
　アカン。妄想が止まらないくらい興奮している！

もしかしてだけど
テンションが、上がっている！
「し、時雨？何か、息が荒くないか？」
「そうかい？なら僕はテンションが上がっているのだろう。ああだが認めよう。そして敢えて言おう。
これは男のロマンだと!!!!」「いや、君女だろう」
「兎に角装備は中にあるのだよね？」
「あ、ああ。そうだと思う」
長月は迷っていた。果たしていきなり可笑しくなった生徒をそのまま突撃させて良いのだろうかと。
この世に生まれてから二週間の赤ん坊だか、この瞬間に置いて人生に二度あるかの決断を強いられている気がす「ゴーーーーーー!!!!!!」
「あ！ま、待て！待てと言っているだろう！時雨！」
まあ、決断が遅かったと言うしかないのだがね

「ここを工房とする!!!!」
「いや、だから工廠な。それと少し落ち着いてくれ」
「無理だ「無理なの!?」
元工業学校出身の僕から言わせれば血が騒ぐのは無理のないことだ。柱島とはいえ設備は十分すぎる程整っているし、これならＫＡＴＡＮＡが作れそうだ！刀じゃないよＫＡＴＡＮＡだよ。そうだね。最低でもＤランクの武器を作らねば太刀打ちできない！
「そうと決まれば早速「長月チョップ！」ヒギイ！は!?僕は、何を・・・」
長月による斜め４５度から抉り込むように首に手刀を打たれ正気に戻る。
たが、長月＝サンからお怒りのアトモスファアを感じるのは気のせいだろうか？
何ともい畳まれない空気になり、長月が口を開いた所で
「あ、お客さんですか？明石の工房へようこそ！」
場違いなほど明るい声は僕が何度もお世話になった明石の声だった。これ幸いと振り向くがーーーーその際、長月からむーっと膨れる声

が聞こえた。何、あの娘僕を尊死させる気なの!?ーーー後ろには誰も居なかった
「・・・・へ？」
「足元ですよ！あしもと！」
　声に釣られるまま視線を下げると
「妖精、さん？」
「明石と名前で読んでください！私は他の子と違うんですよ！」
　明石のコスプレをした、小さな妖精さんだった

「長月さん達の装備は点検し終わっていますよ。修繕費は司令官代理の子が来たので渡しておきましたよ～っと。」
「助かる。これでまた戦えるな」
　長月が艤装を受け取っているのを尻目に、僕はココアを飲みながら装備が来るのを待っている。
　そう言えば艤装って凄く重そうだよね。
　でも北上さんは艤装を投げていたような？いや、あれはソナーだからかな？
「はい！新人さんの装備が此方になります！」
「お～～～お？む？これって、『五連装酸素魚雷』？」
「ダァニィ!?それは本当か！」
「う、うん。あの、僕の装備って『水上電探』か『連装砲』だと思うんですけど」
　確か北上さんの改二で持ってくる装備じゃなかったっけ？時雨の初期装備は『１２・７ｃｍ連装砲』か百歩譲っても『２２号水上電探』と『１３号対空電探』かと思ったんだけど
「それに、君達はもしかして艦隊司令部施設の？」
　コクリと頷き何処から取り出したかテーブルを僕の艤装の上に置く。
　あの、邪魔なんですが……
「これが時雨の装備。だが、何故だ？装備が輝いている気がするのだが？」

「あ、本当だ。でも、目を凝らさないと判りにくいよ」
「ええっと、装備の方は合っている筈ですが……」
　此方を見ながら気まずそうに佇んでいる明石（妖精）さんに大丈夫ですよと言ってから優しく頭を撫でる。途端に彼女はムフー！と目を輝かせて体を揺らしながらお礼を言ってきた
　か、かわゆい
「装備が輝いているのは気になるが……どうだ？『試し打ち』にでも行かないか？」
「試し打ちか。ＯＫ！胸を貸させてもらうよ長月」
　明石さん達に礼を程々に工廠から出る。この世界に来てから初めての実践だと言うのに不思議と恐怖感は無く、むしろ楽しんでさえいた。やっぱり異常だな～と思いつつ今はそれが頼もしい。
「ルールは旗艦大破で決着のリーデスだが、今回はタイマンだ。どちらかが中破した段階で終了。で良いか？」
「了解。あ、電さんに艤装使う事は言わなくてもいいの？」
　念のため聞いて置いた。無断使用とかで罰則を貰うのも嫌だし
　と思っていたらどうやら杞憂だったみたい。なぜなら埠頭の近くで手を振っている影が二つ。一つは白いセーラー服に茶髪の女の子、電さんだったからだ。
　もう一人に目を向けて
　――僕は固まってしまった
「時雨ーーー！頑張って勝つんだよーー!!」
　電ちゃんより濃いめの茶髪をショートヘヤーに天真爛漫を前面に押し出した二ツとした表情。
　そして、白露型特有の黒いセーラー服
「お姉ちゃん応援しているから――!!」
　白露型駆逐艦『一番艦』――白露がいたからだ

「まさかネームシップを出すとは。それに、彼女は時雨のお姉ちゃんか？」

「うん。いつかは出会うかなーって思ってたんだけどね。些か早すぎると言うか何というか」
　前世でも白露には助けられました。詳しく言うと主戦力としてイベントで引っ張りだこでした。ぽいぽいや江風を出したくないな～て時にスッと出てくれる白露さんには感謝してもし切れなかった程。指輪の課金をガチで考えたレベルです。
「そう言う割には嬉しそうだな。」
「そうだね。だって――――自慢の姉（艦隊の現役主力）だからね。カッコ悪い所は見せられないよ。」
「――ふ。手加減するつもりなどないさ。
　長月、突撃する!!」
「ッ!!」
『演習ではＴＲＰＧルールでイクゾー』おいいいいいいいい！冒頭の僕の言った事は!!↑時雨
　ないです。長月と時雨はどちらも高速ですが射程は『連装砲』を装備している長月が上ですので
「こちらから行くぞ！」
≪砲撃・小口径≫５０＝３「……ふ」どや月「初っ端からクリティカルだと!?」
　練度１とは思えない程の巧みな航海術に翻弄され時雨は回避できずに直撃を許してしまう。その一撃は時雨の装甲を貫き意識が飛びそうな程の激痛が腹部を貫く
「いった～～～ッ!!」ＨＰ３６＝３０　ダメージ６（ＣＬのため装甲無視）
「休んでる暇はないぞ！」
「なら！」
　直撃の余波に怯む事無くタービン？をフルに回し長月に急加速する。一瞬長月は不審に思ったが、彼女が『６１ｃｍ五連装酸素魚雷』を装備している事を思い出し距離を取ろうとする。
「くッ！」
　敏捷対抗　　長月・７０　　時雨・??

５０＋??＝８５

「捕まえた!!」

「振り切ったと思ったが」

駆逐艦の特徴に加え、人型になった事による急ブレーキや反転などを使ったが

今回ばかりは時雨のが上手だった

「残念だったね。行け！」

≪魚雷・６１酸素魚雷≫??＝８７「さっきからダイス高くな～い？」

「行き成り魚雷を使っても、当たらなければ意味がないだろう！」

「……角度が甘かった」

「私が手本を見せてやろう！」

≪魚雷・標準≫４０＝５８「ダメだったよ」「これは恥ずかしい。」

「近距離なら、投げればいいじゃない！」

「ふぁ!?」

≪投擲・６１酸素魚雷≫??＝２７「やったぜ」

長月「無茶苦茶だ!!」

≪回避≫５０＝３「なんだって!?」ＣＶ杉田

至近距離で時雨が伏せたと思うとその手には魚雷が握られていた。それを長月が目ざとく見つけ時雨の足元に発砲する。それにより体制を崩され衝撃の余波が鋭い痛みを時雨に与える。蓄積された痛みに時雨の顔が苦痛に歪む

ＣＬによる長月の反撃　１Ｄ３＝３　駆逐装甲１Ｄ３＝２　ＨＰ３０＝２９

「どうした！そんなものか!!」

≪射撃・小口径≫５０＝７４「む」

「！まだ、終われない」

≪射撃・標準≫４０＝３５「よし！」

連撃とばかりに放たれた一撃は時雨の頬を掠めたがなけなしの精神力を振りかぶって至近距離から砲撃を放つ。元々艤装に取り付けられていた物だが

――確実に長月を捕らえた　≪回避≫５０＝８６
その一撃は駆逐艦とは思えない程強力な威力を持っていたようで、着弾した瞬間の覇音は撃った本人ですら脳を揺さぶられる程で駆逐艦の防御など易々と貫き暴力的な熱波が時雨に帰って来る。
勿論、直撃した長月は言わずもがな
「当たり所は良かった……はずなのだがな。私の負けだ。」
２Ｄ６＝１２　駆逐装甲＝３　ＨＰ１３＝４　大破！

「な、だ、大丈夫!?」
「なに、心配はいらんさ。これは演習だからな。すぐに元に戻るさ。」
セーラー服はボロボロに破れ、艤装は破損個所が酷く今にも壊れてしまいそうだが
長月の肌には傷一つ付いていない。話に聞くと艦娘同士での戦いはダメージを全て艤装が肩代わりしてくれるらしく、その時に負った損傷も簡単に治せてしまうらしい。
「な、なるほど。」
「しかし、標準装備の小口径の主砲で一撃で大破とはな。もし酸素魚雷に当たってたらと思うとゾッとするよ。」
そう。勝負を決めた一撃はあくまで『最低限に備えられていた装備』だ。本来の装備じゃない。そう思うと、長月の装甲を通り越して本人に傷を与える事だってあったかも知れない。今更になって取り返しのつかない事にならなくて良かったと安堵していると
「でも、頼もしいな。
「え？」
思わず素で聞き返してしまったが、彼女は年相応に、それこそ画面越しじゃあ見せてくれなかった笑顔を向けてくれた
「背中は任せたぞ。時雨」
「……うん！」
「おーい！二人ともー！」
見知った？声に振り向けば白露が走ってくるのが見える。その奥には木曾さんと北上さんが片手を上げながら来ていた。

い、いつの間に観客に。
「二人ともお疲れ様。時雨、カッコ良かったよ！」
岸へ上がるために手を貸してくれる白露を見て僕はホッとしていた。前世でもお世話になった彼女の天真爛漫さは新しく出来た泊地にはいい意味で風が吹くと思う。
よし。俄然やる気出てきたゾイ！

「耐久３６？」
演習の途中、電は表示されている時雨の耐久値に疑問を持つ。
時雨はそんな耐久の数値はなかったはず。他にもオマケに過ぎない艤装の備え付けの主砲で長月さんが大破。当たり所が悪かったと訝しんだけど、着弾した場所は最も装甲が機能する部位である筈だ。
なのに、結果は一発大破
色々と既存の時雨とは違う。そう電に思わせるのはステイタスだけではない。
「時雨さんと白露さんの服が、微妙に違う？」
白露さんがシンプルな長月さんに似た制服の半袖に対し、時雨さんのは所々に赤いラインが入っており白色も増えている。
明らかに服装が違うのだ。一番艦と二番艦なのに。
さらには明石さんから受け取った本来なら有り得ないはずの装備。
≪６１ｃｍ五連装（酸素）魚雷☆２≫×２　≪艦隊司令部施設≫
≪補強増設に応急女神≫
これらの事例から電はある〝仮説〟を思い浮かべるが
「時雨さん。貴方は、もしかして――――」
彼女の問いに答える人物（司令官）はまだいない